

子ども食堂の偏見はどこからなのか

3年3組27番 林明香里

1. はじめに

私の探究テーマは、子ども食堂の偏見についてである。このテーマにしようと思ったきっかけは、小学生の時に子ども食堂に行っていたことがあるが、そのことを周りの人に話すと「子ども食堂は可哀想な人だけが行くところだ」などのことを言われたからだ。近年、SNSなどで子ども食堂の存在が認知され始めているが、一方で、生活困窮者のためのところということを悪い方向に考えている人々も増えている。それらが増えていくと、本当に子ども食堂が必要な人たちが行きにくい環境になってしまうという事態になってしまうかもしれない。子ども食堂は貧困家庭への支援以外にも、子どもへの食育や地域での交流などの役割があると考えているのでこのように子ども食堂へ行く子どもが減ってしまうことはいけないと考えた。

2. 序論

そこで、私は「子ども食堂の偏見はどのような人にあるのか」という問いを立て、子ども食堂の偏見についての探究をすることにした。

今の子ども食堂は、いくつかの領域に分かれており、ターゲットを限定しているかとターゲットを限定しないで誰でも参加できるか、地域づくりに重点を当てているか課題を発見することに重点を置いているかで分かれている。ターゲットを限定していない子ども食堂は、支援を必要としている子どもは生活困窮者だけではないとされている。また、ターゲット層によって子ども食堂の在り方は変わっている。ターゲットを限定している子ども食堂(ケア付き食堂)では、食事を通して信頼関係を得、学校や家庭などの問題に対応し、ターゲットを限定していない子ども食堂は、様々な人々が交流するとされている。厚生労働省の調査によると、全国の子ども食堂のうち、約78%が参加するにあたっての条件がなく、約58%が多世代の交流が主な目的であると発表した。また子ども食堂は、子供を真ん中に置いた多世代交流の地域の居場所、人をたてにも横にも割らない公園のような場所であるとされている。また、約4%が子ども専用、約5%が生活困窮者であるとされている。しかし、子ども食堂の利用対象について、ひとり親家庭、生活困窮者が行くところという考えの人が半数を超えており、まだ世間での認識は変わっていないことがわかる。実際、それによって一部の子ども食堂で本当に必要としている人に届いていないと言う問題が発生していると言う。そこで、このような偏見はどこから来ているのか、どんな偏見があるのかと言う疑問ができた。

3. 本論

この探究では、実際に子ども食堂に参加したり、本校の生徒達の声の聞いたりして身の回りでの子ども食堂に関するイメージを調査した。まず、アンケートで調査した結果、子ども食堂に偏見があると30%が答えた。子ども食堂の活動や実態をあまり知らなかったり、存在自体を知らない層がほとんどだった。一方で、子ども食堂に興味がある人や実際に行ったことがあると数人が答えた。そして、子ども食堂のことをよく知っていると答えたひとは、CM やニュースで見たことがあり、そこから興味を示したりした人が多かった。また、子ども食堂について少し偏見があった人も、子ども食堂には悪いイメージを持っている人はいなかった。

子ども食堂への参加やボランティア活動では、今回はターゲットを限定していない子ども食堂へ行った。食事の配膳や手伝い、一緒にゲームをしたりなどの交流を通して、子ども食堂は食事の提供だけでなく、子どもたちの安心や交流のための大切な場所だと改めて実感した。活動中、最初はみんな緊張していて、中にはあまり喋らない子もいたが、食事の会話を通して少しずつ笑顔を見せてくれたり、自分から話したりしていて、最終的にはスタッフの方々も含んでみんなの距離感が近くなったと感じた。また、スタッフの方々の工夫なども聞くことができた。その子ども食堂は地域の方の食料や資金などの支援や協力などによって成り立っているという。また、食事のメ

ニューもバランス良く、楽しんで食べられるように考えているなど、周りの人々によって子ども食堂は成り立っていることがわかった。

アンケートの通り、子ども食堂のことを知らないほど偏見を持ちやすいが、実際に参加してみたりすることで理解が深まり、偏見を減らすことができると考えた。

4. 結論

この探究では、子ども食堂の偏見について調べた結果、偏見がある人々は子ども食堂の活動や目的について十分に知らない傾向があることがわかった。したがって、子ども食堂への偏見は人々の情報不足から来ていることがわかった。偏見をなくすには、子ども食堂の活動の理解を広めることが大切だということが分かった。しかし、今回は狭い範囲だったり、ターゲットを限定しているところには行くことができなかったりなどで、この探求ではまだ十分な調査ができなかった。なので、範囲を広げてみると他の意見もあるかも知れないので、そこから子ども食堂への理解を広めるためにどのような活動をすればいいか、またどのような方法や取り組みが効果的なのかを考え、実行する必要がある。しかし、その課題までには辿り着いていないのでこの課題については今後もさらなる交流などを通し、継続して探究し、最終的には実行までを目標とし、子ども食堂の更なる発展を目指していこうと思う。

5. おわりに

この探究や結果を通して、偏見は知らないことによって起こりやすいことがわかったので、自分が知らないことも誤ったイメージを持つ前にそのことを知ろうとすることが大事だと学んだ。また、知識を得るだけでなく、自分の考えを見直すことでより良い理解ができると考えた。探究での経験を通して、問題に対して正面から向き合い、自分から積極的に行動して交流していくことの大切さを学んだ。そして、人と関わり、考えを深めていくことで、問題を様々な視点で考えることの大切さを実感した。今後も学んだことを大事にし、様々なことに関心を持ち続けて、自分から積極的に活動していきたい。そして、今回の経験で、課題に対して周囲の人々と意見を交わし、じぶんの視野を広げていく姿勢を大事にしていきたい。

6. 参考文献・出典

認定NPO法人全国子ども食堂支援センターむすびえ

<https://www.mhlw.go.jp/content/12000000/001092838.pdf>

子ども食堂の調査結果 厚生労働省

<https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000532665.pdf>

First Donate「違和感」子ども食堂食堂を気持ち悪いと感じるその誤解を解き、未来を支える

<https://firstdonate.jp>

柏木 智子(2017)「子ども食堂」を通じて醸成されるつながりの意義と今後の課題—困難を抱える子どもの参加と促進条件に焦点をあてて— 「立命館産業社会論集」

53,2—3.